

第8次復興支援ボランティア

派遣期間	2012年 8月10日(金)～12日(日)				
派遣場所	宮城県七ヶ浜町	派遣人数	12名	長電全体	36名

《参加者氏名》

	氏名	所属組織名		氏名	所属組織名
1	丸山 育男	基幹労連 I H I ターボ 労組	7	吉池 浩一	JAM アピックヤマダ労組
2	大平 幸一		8	吉池 俊郎	家族
3	増田 充康		9	森川 弘	電力総連中部電力労組
4	杉原 努	電機連合鈴木労組	10	土岐 誠	電力総連関西電力労組
5	阿藤 日向		11	両澤 正樹	農団労信州うえだ労組
6	一色 幸雄	電機連合信越富士通労組	12	飯嶋 忠造	

《3日間のスケジュール》

8月10日(金) 晴れ

12:15 VCに到着

13:00 吉田浜の田圃ガレキ撤去作業

15:00 VCに戻り道具の片付け

8月11日(土) 曇り

10:00 吉田浜の田圃ガレキ撤去作業

15:00 作業終了後、町内の視察

8月12日(日) 曇り

10:00 吉田浜の田圃ガレキ撤去作業

12:00 VCに戻り帰路につく

18:30 佐久乃おぎのやへ到着



《参加者の想い・感想》

[基幹労連 I H I ターボ労組・丸山 育男]

災害から1年5カ月過ぎて、どんなボランティアがあるのかと内心不安な部分もあった。

メディアで見るかぎり大きな瓦礫は片付けられている印象があり、力強く前進しているイメージもあったからだ。



しかし、現状はというと田畑にガラス・瓦・石などがあり作付ができない状況であった。

眼前に広がる細かな瓦礫がたくさん落ちている田んぼ、これを拾うのかと思うと気が遠くなったが、一人の力は大きしたことではないけれど、同じ気持ちを持った人がたくさん集まれば大きな結果が出ると思いました。

時がたち、災害が少しずつ忘れられていく中で、この現状を少しでも多くの方に伝えていかなければならないことを痛感いたしました。

[基幹労連 I H I ターボ労組・大平 幸一]

生まれて初めて東北の地に足を運んだ理由が、震災から一年五カ月を迎え、復興支援の為という事で、複雑な想いでした。



しかし、参加者の顔ぶれを見ると、ご家族で参加している方や、既に何回もボランティア活動している方もいて、何故か急に気合が入りました。

作業内容としては、田んぼの瓦礫撤去という事で本当に地道な作業でしたが、被災者の方々の気持ちを考えると熱いものが込み上げて来ました。

今回、参加させていただいて、ほんの一部でしか無いけど、自分の目で被災地を見て感じた事を、周りの仲間に伝え、助け合う輪を少しでも広げて行きたいと思います。

[基幹労連 I H I ターボ労組・増田 充康]

この度の復興支援ボランティアにおいて大変有意義な時間を過ごさせていただきました。

私は今回が初参加でしたが、中には10回以上、月2回、親子で来ている人達もいらっちゃって驚きました。活動場所はかなり片付けの進んでいる所でしたが、未だに手つかずの所も沢山あるようです。実際に現場で建物を見ながら説明を受け、津波の恐ろしさ、被災地の人々の苦しみを今までより少し身近に感じられたことが収穫でした。

また、最終日のリーダー坂口さんの話の中に出てきた「微力ではあるが無力ではない」という言葉が今でも心の中に残っています。

今後も時間を作って参加し続けたいと思っています。

[電機連合鈴木労組・杉原 努]

今回で2回目の参加で、前回6月に参加した時と同様に田畑のガレキ撤去をしてきました。

6月に見たガレキ撤去できてない場所が今回見てもほとんど変わってなく、まだまだ時間がかかるなと思いました。でも、ガレキ撤去が終わった畑に大豆を植えて、それがすくすく育っていて、その範囲も広がっていました。本当にうれしく思ったし、少しずつだけど一歩ずつ前に進んでいると思いました。

復興支援にも色々あると思います。現場に行ってガレキ撤去をするのもそうだけど、行けなくても三陸産の物を買うのも復興支援の一つだと思います。

今回で感じた事、思った事をまたみんなに伝えていきたいと思っています。

[電機連合鈴木労組・阿藤 日向]

実際に被災地を見て改めて震災の怖さを実感しました。

今回の作業では浜近くにある畑の津波で流されてきたゴミを撤去するという作業でした。当時は車など大きなものがあつたそうですが、今はそういう大きなものは撤去済みで貝殻や小石など小さなものを取り除く作業をしました。

畑は広く個人の所有者だけではどうにもならない状態だと聞きました。一人ではできない事でもボランティアとして多くの人たちが参加して今ではきれいな畑になりつつあります。一人ではできない

作業でもみんなで集まればきれいになるんだという団結力を感じました。

今回活動した場所以外で、もっと深刻な所はまだたくさんあります。震災から1年5ヶ月たった今でも手付かずの場所もあると聞きます。このままでは終われないって気持ちになりました。

もし時間に少しでも余裕があったらまたボランティアとして役に立たせてもらいたい。そんな気持ちになったボランティア活動でした。

[電機連合信越富士通労組・一色 幸雄]

日頃より復興支援に強い思いがあり今回のツアーに参加しました。小学生から62歳熟年の幅広い年代の仲間と一緒に出来ました。

作業は重機で起こした田んぼのガレキ撤去で土を少しずつふるい掛けしガラス・不燃物・可燃物に分別する地道なもので炎天下の中皆さん汗だくになりながら行いました。土ぼこりが湧き上がる劣悪な環境で目や喉には堪えましたが、作業後の達成感は爽快でした。



▲本人と右は中電労組の森川さん

今後も同様な作業を繰り返した後に除塩を行い稲田にするようですが、復帰には相当な時間がかかるようです。VCのリーダーの言葉の中に「私達の活動は微力ではあるが無力ではない」。とても感銘しました。

この度、連合長野の呼びかけにより貴重な経験をさせて頂きました。今回のツアーを足掛かりにリピーターとなり仲間に声をかけ活動の活性と拡大に取り組んでいきます。

大変ありがとうございました。

[JAM甲信アピックヤマダ労組・吉池 浩一]

大学生の息子と初めて参加しました。

現地での作業は、田んぼの中にあるものを石・燃える物・燃えない物・ガラスの4種類に分別し、土のう袋に詰めました。重量物を運搬する作業ではないので、誰でも参加できます。

作業終了後、七ヶ浜の海岸沿いをバスで案内していただき、防波堤から数百メートルに渡って家の基礎と塀しか残っていない風景を見て、震災の悲惨さを実感しました。

今後、現地の様子と一緒に参加したボランティアの熱意を、職場の皆さんに伝え、多くの人がボランティアに参加するよう働きかけて行きたいです。



[電力総連中部電力労組・森川 弘]

はじめに復興支援ボランティアの企画をしていただき心から感謝いたします。

私は東日本大震災から自分も被災地の人たちの役に立ちたい、被災地へ行って何かお手伝いしたいと思いはあったのですが、ボランティア活動の知識や経験がまったくない自分にとって、単独で被災地へ行くことはハードルが高く、一步前に足踏み出せず、被災地支援の思いを半ば諦めかけていたところ、連合長野が被災地支援者の募集をしていることを知り、これなら単独でも頑張れるかも知れないと思い参加を決めました。

そして、本企画に参加した他の参加者と一緒に、生まれて初め実施する田んぼや畑に落ちている小さな瓦礫き拾いは、とても地味で根気が必要な作業でしたが、微力だけれど私も被災地の支援に協力できている、自分は役に立っていると実感することができました。

また、共に瓦礫拾いを頑張った他の参加者の方々と過ごした3日間は、他の参加者からボランティアに対する考え方や行動等を情報交換できる場面もあって、自身のボランティアに対する意識が今まで以上に前向きに変化するとともに、支援活動を通じて初めて出会った参加者が、同じ目的で同じ作業を行ったことで一体感と仲間意識を感じたことは、生まれて初めて感じた感覚であり、とても有意義で貴重な時間となりました。

終わりに、本企画の支援活動を通じて「支援活動は正しく継続！」の積み重ねであると実感しましたので、今後も本企画を継続していただけることをお願いして感想とさせていただきます。



[電力総連関西電力労組木曾川支部・土岐 誠]

「震災から1年以上過ぎたけど、被災地はどうなっているのだろうか？現地に行って少しでもその空気を感じ、寄り添うことができるようになれば」との思いを抱いて、長電・連合長野復興支援ボランティアに参加した。

このようなボランティアツアーには、生まれて初めての参加であったが、参加者の中には今回で10回目の参加となる方や、はるばる名古屋、富山から参加された方など、被災地に対する熱い思いを持った方たちがたくさんいた。そのためか、知らない人ばかりの2泊3日のツアーではあったが、いつの間にか一体感が生まれ、非常に良い雰囲気が作られていったと思う。

初めて訪れた七ヶ浜町では、田んぼの瓦礫拾いを3日間行った。暑い中、大汗をかきながら。それでも、七ヶ浜の復興に少しでも役に立てたのではないかと、大きな満足感を感じました。

七ヶ浜の被災地を見て、まだまだ、本格復興には時間が掛かり、さまざまな支援が必要だと思った。しかし、今回の感じたことをさまざまな人に語り伝えることで、少しでも支援につなげたいと思う。微力ではあるが、自分としてやれることを今後も続けたいと思う。

第9次復興支援ボランティア

派遣期間	2012年 8月24日(金)～26日(日)				
派遣場所	宮城県七ヶ浜町	派遣人数	6名	長電全体	29名

《参加者氏名》

	氏名	所属組織名		氏名	所属組織名
1	宮崎 栄一	電機連合鈴木労組	4	井口 渉	自治労県職労諏訪支部
2	後藤 利博	電力総連東京電力労組	5	手塚 佳夫	自治労県職労上小支部
3	上村 了一		6	宮本 博夫	自治労長野市職員労組

《3日間のスケジュール》

8月24日(金) 晴れ

- 12:45 VCに到着
- 13:00 畑のガレキ撤去作業
- 15:00 VCに戻り道具の片付け

8月25日(土) 晴れ

- 10:00 畑のガレキ撤去作業
- 12:00 VCにて昼食休憩
- 13:00 畑のガレキ撤去作業
- 15:00 作業終了後、町内の視察

8月26日(日) 晴れ

- 10:00 畑のガレキ撤去作業
- 12:00 VCに戻り帰路につく
- 18:25 佐久乃おぎのやへ到着



8月24日(金) 宮城県七ヶ浜町 花淵浜

《参加者の思い・感想》

[電力総連東京電力労組松本総支部・後藤 利博]

前回(3/9～3/11)の参加に続き、今回で2回目の参加となりました。

前回は、荒天の影響によりほとんど作業が出来ず、不完全燃焼だったため、今回もう1度参加させて頂きました。

作業は、畑の中の瓦礫処理でした。スコップ等で表面から20cm程度を掘り起こし瓦礫を拾う事の繰り返しでしたが、炎天下の元での作業となり、かなり疲労感を感じました。

手には豆が出来、大量の汗をかき、達成感も得られ完全燃焼出来ました。

細かく地味な作業ではありましたが、こういった作業こそ地元の皆さんに喜んで頂けるのかな?と思いながら作業をしました。

これからも機会があれば東日本の復興に力を注いでいきたいと思います。

[電力総連東京電力労組松本総支部・上村 了一]

ボランティアに参加するのは2回目でしたが、前回は悪天候のためほとんどボランティア活動が出来なかったため今回参加しました。

ボランティアの内容は、これから畑として再生させようとしている土地のガレキ撤去や草取りといった作業でした。自分達の作業だけではまだまだ畑としての再生は出来ていないので、引き続きの支援が必要だと思います。

これからも率先してボランティア活動に参加したいと思います。

「自治労長野県職員労組諏訪支部・井口 渉」

昨年の3月11日以来、ずっと東北の被災地に行って何か役に立ちたいと思っていました。職場のツアーでも多くの若い方々が手を上げてくれるため、なかなか参加できず、仕事の都合もあり悶々としていたところ、連合長野様のお計らいで、長電観光様の復興支援ボランティアツアーの案内が来て、念願叶い、被災地へ行って、復興のお手伝いが少しでも出来たことを非常に喜びとして感じています。

今回参加した方の話を聞いても、同じような思いの方も多く、帰ってから多くの方にツアーの話をしております。書きたい事、感じた事は山のようにありますが、この様な機会を作っていただいた連合長野様と長電観光様に感謝です。

「自治労長野県職員労組上小支部・手塚 佳夫」

連合長野復興支援ボランティアに参加させて頂き、大変有難うございました。昨年の3月11日以来、初めて震災地を訪問し、貴重な経験をさせて頂きました。

正直申しまして、今頃なってボランティアで何ができるのか、興味本位で行くことになるのではないかとの思いもありました。

しかし、実際に現地で多くのボランティアの方々にお会いをし、震災に会われた方の話をお聞きすると、まだまだ多くの人の力が必要であることが分りました。

また、現地の方々からは、今回体験したことを帰ってから是非多くの人に伝えてほしいと、強く要望されております。

七ヶ浜町のボランティアセンターは、組織的にもしっかりしており、毎日150～300名のボランティアを受け入れています。地元の多くの若者がボランティア活動のリーダーとして活躍しており、大変頼もしく感じられました。

今回ご支援を頂きました連合長野、長電観光のご関係者に、厚く御礼申し上げます。



[自治労長野市職員労組・宮本 博夫]

今回参加してみて、ようやく一步を踏み出せたことにささやかな安堵感を抱いています。

3. 1 1の当初から自分も何かしたい、一度は現地を訪れてお役に立ちたいという気持ちはありましたが、行動に移せませんでした。

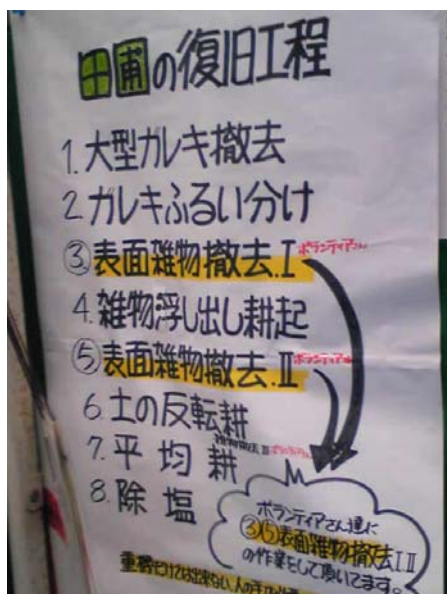
参加に当たり、炎天下で作業することや、見ず知らずのツアーに参加することへの不安がありました。実際に参加してみて、暑かったけれども海水が入って固くなった畑の中から次々に出てくる大小のがれきを参加者と協力して黙々と掘り起こしました。

ツアーという寄せ集めの集団が、復興支援という想いで一つになっていることが感じられました。復興は果てしない作業ですが、全国から次々にボランティアが訪れて支援していることが、全体でウェーブを形作っているような心強さを感じました。

この企画をして下さった長野電鉄さんそして連合さんに深く感謝申し上げます。



▼ 田圃の復旧工程



▼ VCのシンボルのウサギ2匹



第10次復興支援ボランティア

派遣期間	2012年 9月28日(金)～30日(日)				
派遣場所	宮城県七ヶ浜町	派遣人数	3名	長電全体	20名

《参加者氏名》

	氏名	所属組織名		氏名	所属組織名
1	原 太市	自治労県職労長野支部	3	中澤 富子	農団労信州うえだ労組
2	小坂 勇太	自治労県職労本庁支部			

《3日間のスケジュール》

9月28日(金) 雨のち曇り

13:00 畑のガレキ撤去と草むしり作業

15:00 VCに戻り道具の片付け

9月29日(土) 曇りのち晴れ

10:00 畑のガレキ撤去と草むしり作業

15:00 VCに戻り道具の片付け

9月30日(日) 曇り

10:00 田圃のガレキ撤去作業

12:00 VCに戻り帰路につく



《参加者の想い・感想》

[自治労長野県職員労組長野支部・原 太市]

今回、連合の募集に応募して、初めて復興支援ボランティアに参加しました。

まず驚いたのは女性の参加者が多く、半分以上が女性でした。大学生から主婦の方までいて、女性のパワーに感動しました。

七ヶ浜は、まだまだ手助けを必要としています。畑や田にはガレキが残っており農業再開にはまだ人の手による作業が大切です。田には塩分の含んだ表土が高く積み上げられています。

今回参加して、少しでも役立った事が良かったと思います。

[自治労長野県職員労組本庁支部・小坂 勇太]

今回、私は七ヶ浜町で畑のガレキ撤去のボランティアをしてきました。

津波にあった畑は、重機で掘り返し、出てきたガレキを人の手で撤去するという作業をくり返すことで、ようやく再び使えるようになります。それが済んでいない畑は東北沿岸地域に沢山あるとのことでした。

そんな中、私がお手伝いできたことは本当に少しでしたが、農家の方から「これで再来年ぐらいから農業を再開できる」とお話しいただき、少しでもお役に立てたことを実感できました。

第11次復興支援ボランティア

派遣期間	2012年10月 5日(金)～ 7日(日)				
派遣場所	宮城県南三陸町	派遣人数	30名	長電全体	※貸切

《参加者氏名》

班	氏名	所属組織名	班	氏名	所属組織名		
1	林 長弘	自治労県職労木曾支部	16	2	大熊 義夫	自治労県職労木曾支部	
	中村香緒里	自治労県職労諏訪支部	17		磯尾 典寿		
	柄澤 裕美	自治労県職労諏訪支部	18		古畑 順子	自治労朝日村職員労組	
	杉山 圭子	自治労飯田市職員労組	19		魚住 友紀	全労金長野県労金労組	
	遠藤 雅子		20		秋山 直美	UIゼン/地同盟片倉機器労組	
	福田 耕平		21		原 忠博	電機連合長野日本電気労組	
	7	遠藤 航平	JAM甲信野村ユニソン労組		22	大澤 淳	自治労安曇野市職員労組
	8	竹村 壽一			23	山田四七夫	
	9	松尾有里子			24	原 未来	自治労松本市職員労組
	10	矢澤 正之	JAMSUWA プトロクx労組		25	小澤亜由美	
2	11	阪下多賀子	電力総連東京電力労組 松本総支部	26	三村 竜一		
	12	小口 英明		27	増澤 未咲		
	13	中屋 亨		28	関森 雄紀	電機連合鈴木労組	
	14	山本 佳靖		29	佐藤 美佐	連合佐久地協事務局	
	15	増井 香織		30	成沢 勇次	連合長野事務局	

《3日間のスケジュール》

10月 5日(金) 晴れ

- 2:30 おぎのや諏訪店を出発
- 3:00 松本合同庁舎前バス停を出発
- 4:00 おぎのや長野店を出発
- 4:50 おぎのや諏訪店を出発
- 12:30 南三陸町 VC 到着
- 13:00 田尻畑地区で伐採杉の運搬・分別作業
- 15:30 作業終了し VC 出発



- 15:40 さんさん商店街(津波被害を受けた商店数十店が集まって作った商店街)の南三陸町観光協会にて『ガイドサークル夕風』の芳賀タエ子さん(語り部で兄弟を津波で亡くされる)より、震災当時の話しをスライドも交えてお聞きする

- 17:00 さんさん商店街を出発
- 19:25 ホテル到着
- 19:45 団結会

10月 6日(土) 曇り

- 6:00 ホテル出発
鉄骨だけの南三陸町防災対策庁舎前で黙祷行う
- 7:50 VC 到着
- 9:00 田尻畑地区で1班は伐採杉の運搬・分別作業、2・3班はガレキ撤去作業



15:30 作業終了しVCを出発
15:40 さんさん商店街で買物
18:30 ホテル到着

10月 7日(日) 曇り

6:20 ホテル出発
8:00 VC到着
9:00 田尻畑地区でガレキ撤去作業
13:00 VC出発
13:10 漁港で慰霊の黙禱行う
21:10 佐久乃おぎのやへ到着
21:50 おぎのや長野店へ到着
22:35 松本合同庁舎前バス停に到着
23:10 おぎのや諏訪店に到着



《参加者の思い・感想》

[自治労長野県職員労組木曾支部・林 長弘]

南三陸町の復興は、震災から一年七ヶ月も経っているのにあまり進んでいないことを改めて感じた。瓦礫撤去は重機だけではなく「人の手」が必要であり、また作業内容によっては、予想はしていたが力仕事であった。

大津波の被害は甚大で、建物の基礎部分のコンクリートを目の当たりに見て、言葉を失った。作業をしながら「何とかならないのか。少しでもお役に立てれば・・・。」と。

今まで豪雨災害の被災地にボランティアで行ったことはあったが、やはりこの震災は「ケタ違い」の支援が必要である。

[自治労長野県職員労組諏訪支部・中村 香緒里]

昨年の3月11日以降、被災地に自分も行きたいと思う反面、何の特技もない自分が行って何ができるのだろうとも思い、一年半過ごしてしまいました。

でも今回、東日本大震災復興支援ボランティアに参加する機会をいただき、南三陸町で皆さんと一緒に倒木の選別やがれき撤去の作業をして、まだまだ人手が必要とされている地域があること、自分でもお役に立てることが分かりました。また、一緒に作業したボランティアリーダーの方々のお話を聞き、熱心に関わり続けている人達がいることを知りました。

仙台に住む友人は、一番の支援は忘れないことだと言いました。

時間の経過とともにボランティアが減り、結果置き去りになる地域が出ないよう、私たちは関心を持ち続けなければいけないと思います。そして自分のできる形の支援をし続けたいと思います。今回は貴重な経験をさせていただき、ありがとうございました。

[自治労長野県職員労組諏訪支部・柄澤 裕美]

震災以来、幾度となく東北に足を運んできましたが、回を重ねるごとに、被災地を見る目や被災者に対する気持ちが麻痺していくことをうすうすと感じていました。そんな思いの中で参加した今回の南三陸復興支援ボランティアでしたが、何か見失いつつあった気持ちを再び覚醒させてくれた心に残

る場面を2つ紹介します。

1つは、初日の活動終了後に聞いた語り部の芳賀さんとの出会いです。

遠くに住む者にとっては「震災は1年半前のこと」なのかもしれませんが、被災地に住む方の多くが、今でも、そしてこれからも、震災の日のことは思い出したくない、話したくない、というのが本音だと思います。それでも自分の町に来てくれた者のためにと、芳賀さんがいろんな思いを抑えて私たちに伝えてくれた気持ちを思うと、とつても切なくなります。別のボランティアツアーに参加したときに町を案内してくれた語り部の方も、爪痕残る骨組みだけの建物はまだ直視することができない、と言いながらも、それでもいろいろなことを伝えてくれたことを思い出します。



その街を復興させるのは、やはりそこでずっと生きていく人なんだと改めて教えられた気がしました。当たり前ですけど。

そしてもう1つの忘れられぬ出会い、それは行きのバスの中で見たDVDの最後に流れてきたメッセージのひとつ、「停電すると、それを直す人がいて、…（中略）…俺らが室内でマダカナーとか言っている間、クソ寒い中死ぬ気で頑張ってくれてる人がいる。」— なんか心に沁みてきます。

行政の原点として、なんだか皆さんに肩をたたかれたような気がしました。だから、これからもいろいろな活動を経験し、多くの人と一緒に汗を流す中で、公務員としての幅と人間としての深みを増していければよいと思っています。「行政、やるじゃん」、そう言われるのも悪くないですから。

[自治労飯田市職員労組・杉山 圭子]

被災地に対する色々な想いを胸に、今回初めてボランティア活動に参加させていただきました。

主に枯れ杉や民家のガレキ撤去作業を行いました。皆で作業しどンドン片付く様子を見た時、嬉しい思いと協力し合って活動することの大切さを改めて感じました。

まだ手付かずの場所が沢山あり、今後も継続してのボランティアの必要性を実感しました。

今回携わった場所の杉も被害には遭いましたが、ガレキとして終えることなく新園舎として生まれ変わったとの話を聞き心温まる思いでした。

今回このような機会を下さった長電観光様、連合長野様、そして、一緒に作業された皆さん本当にありがとうございました。

がんばっぺ南三陸

[自治労飯田市職員労組・遠藤 雅子]

2度目の参加で見た、仙台の町並みは、高速道路建設も終わって震災を感じさせないほどすっかり綺麗になり連休もあってか人があふれ活気に満ちていた。その仙台を通過して向かった先の南三陸は、震災の爪あとそのまま、報道されたままの姿であった。この復興格差に唖然とした。町の7割が被災し犠牲者もあまりに多く、水産加工の基幹産業が壊滅している南三陸町のこの一年を思う。

昨年訪れた七ヶ浜町で被災地を知っている気になっていた自分が恥ずかしい。

私たちの作業は、住居付近の瓦礫の撤去作業であった。一見すると建物の基礎のコンクリートを残して、瓦礫は撤去されているかに見える現場である。が、そこにある土は、ガラスや石膏ボード、瓦、プラスチックの破片、鉛筆、おもちゃなど、築いてきた生活そのものを、津波により押しつぶされ波にのまれ、破壊しつくされた瓦礫なのであった。瓦礫を分別していく。一人では、出来ない作業であ

る。ボランティアに志願した仲間がいるからできる。人海戦術で分別の山が大きくなっていく。

復興への道のりも、この瓦礫処理のように複雑で問題が山積している。が一年経ってボランティアに全国から応援に駆け続ける仲間励まされる。そして、地元商店の店主たちもプレハブの「さんさん商店街」を作って一步を踏み出していた。私も南三陸産わかめを買って食べて配って、応援し続ける。南三陸、東北、復興とともに私も歩んでいく。

復興財源を被災地の復興と無縁にむさばる国政に情けなくなる。国の迷走に「NO」を突きつけ、主権者として、復興に進むように声をあげていこう。

[自治労飯田市職員労組・福田 耕平]

組合に回覧される「ボランティア募集」の言葉を目にしていたのですが、なかなか足が向かず、ようやく参加させていただきました。私の中で震災を思い浮かべると「揺れ」よりも「津波」のイメージが強く、今回作業を行った南三陸町の防災庁舎は鉄骨だけ残し、周辺住宅は、コンクリート基礎以外、みな流されてしまった状況でした。

初日と2日目は、津波による塩害で枯れた杉の伐採跡を木材・枝・皮に分別する作業でした。木材を掘り出し運ぶ作業は地味な作業でしたが重労働で足腰がすぐ痛くなってしまいました。しかし、山となっていた木材は分別・整理することができたと思います。

最終日は、田、畑、住居跡を覆う土砂から、ガラス片・コンクリートガラ・瓦などの撤去作業でした。30人で作業した範囲は田んぼ2枚程度でしたが、土は非常に固く、草が根を張り非常に掘り起こしづらいものでした。その為、すべてを除去することはできず、ひとつの田、畑が復元するまでに、除去作業を何回も繰り返す必要があると感じました。

南三陸町の復興、復旧に向けた一步を、参加した私たちの手伝いで多少なり支えになったのではと思います。しかし震災後1年半という歳月を経て、尚且つたくさんのボランティアが作業を行なっても、まだまだ人手が足りないこの現実の厳しさを知りました。

機会があれば、またボランティアに参加し地域のお手伝いをしたいと思います。参加を考えている方、たまたま読まれた方、一度現地へ行ってみてください。思っているよりも復興・復旧は進んでいないのです。

伝えなくてはいけない事

[JAM甲信野村ユニソン労組・遠藤 航平]

以前から参加したいと思っていた東北復興支援ボランティアについて参加する事が出来ました。

震災から1年半ぐらいたちますが、現地は家の基礎しか残っていない、テレビで見たまんま、このガレキの山を完全に無くすにはあとどれくらいかかるだろう、思った以上に復興にはまだまだ時間がかかる現状を身を持って体験しました。

年数がたつと震災の事を忘れ、ボランティアがどんどんと少なくなってしまう現実。

この事をたくさんの人に伝えなくてはいけないと思います。

[JAM甲信野村ユニソン労組・竹村 壽一]

今回、私はボランティアに初めて参加しましたが、高速で福島から宮城に入り、仙台あたりまではごく普通の風景に見えました。

しかし、仙台を越えたあたりから徐々に地震、津波の被害を感じられるようになり、南三陸町に着

いた時には、まるで戦争があったかのように自分の目には映りました。家の基礎ばかりが目に入ってくるのですが、建物自体はほとんど無く草などが生い茂り、地震があつてから1年半という時間が経った事は感じられましたが、仙台とは違い復興自体はほとんど進んでいませんでした。

地震の被害を家の引っ越しと比較するようなものではないですが、家の引っ越しや片づけは大きいものは比較的早めに移動できます。しかし、細かいものは見た目以上に時間がかかります。南三陸町も、大きながれきは撤去されているところは多かったように思いましたが、今回のボランティアで行った木の分別や、土の中の細かいものの撤去等には計り知れない時間と人手が必要だと感じました。今回30人で3日間行ったボランティアでは、目の前のものはきれいになったようにも見えましたが、被害のあった場所のごくごく一部でしかありません。昨年も参加した方が言っていました、昨年と状況は大きくは変わっていないとのことでした。ボランティアへの関心が少しずつ薄れていっているように感じられますが、やはりまだまだ多くのボランティアが必要だと改めて痛感しました。

このボランティアに参加したのは会社の組合を通して、連合長野さんより連絡をいただいたからです。長連合野さんのおかげで私は参加することが出来ましたが、機会があれば参加してみたいと思っている人は、たくさんいると思います。個人で参加する場合、仕事やお金の問題も大きく、とても強い信念と大きな覚悟が必要になる場合もあるはずです。

しかし、今回のように団体で機会をいただければ、私のように参加できる人はもっと増えるはずです。ぜひこれからも、このような機会を作っていって欲しいです。ありがとうございました。



▲ 野村ユニソン労組の竹村・遠藤・松尾さん(右から)

[JAM甲信野村ユニソン労組・松尾 有里子]

今回初めて復興ボランティアに参加させて頂きました。家が流されて更地になっている光景や、中身が流されて空っぽの建物などを実際に目にし、ただ言葉がでませんでした。津波の恐ろしさを見せつけられても、想像ができませんでした。

作業は伐採された杉の木、がれきの撤去をしました。復興にはまだまだ時間がかかるということ、一年半以上たった今もこのような力仕事が残っていることが驚きでショックでした。

移動も長く、力仕事で大変でしたが、本当に行って良かったです。これからも継続的な支援に繋がるように自分のできることをしていきたいなと思いました。

[JAM甲信SUWAオプトロニクス労組・矢澤 正之]

震災から1年半経ち、被災地にまだやるが残っているのだろうか、と思いながら参加しました。現実の南三陸町の被災地は大変な状況のままでした。作業をしながら、津波の爪痕と復興までかか

るだろう長い道のりに愕然としました。

被災地から離れて暮らしている自分の周りでは話題にならなくなった被災地の現状を伝え、そしてこれからもボランティア参加や、その他いろいろなかたちで出来る限りの復興支援をしていきたいと思いました。

[電力総連東京電力労組松本総支部・阪下 多賀子]

3日間、南三陸町のボランティアに参加させていただき、震災から1年半以上経っているのに、南三陸町の復興にはまだまだ時間がかかると思われました。

作業は、瓦礫処理で人の手でないと分別出来ない細かい瓦礫の処理で、地道な作業でしたが、そこで暮らしていた跡が感じられる物などが出てきて、心が痛くなりました。

震災直後に比べ、TV報道でも震災関係の報道が減って来ていて、みんなの意識も薄れているのかな？と感じますが、連合長野では息の長い活動をとの事で今後もボランティアは実施する予定と聞き、また参加したいと思います。

良い経験が出来ました。ありがとうございました。

[電力総連東京電力労組松本総支部・小口 英明]

今回のボランティアに参加させていただき、東日本大震災の被害状況、大津波の規模を現地で実感しました。

復興が進まなくとも、現地の方の過去を振り返るより前へ前へと向かう姿勢が十分伝わってきました。自分の「当たり前」のことが「当たり前」と思っていたことの甘さ、そのことのありがたみも現地で十分考えさせられました。

まだまだ復興には時間がかかりますが、現地で感じたこと、思ったことを大切に、自分が出来ることを考え、見つけ、実行していきたいと思います。

[電力総連東京電力労組松本総支部・中屋 享]

震災から1年7ヶ月経過して、初めて復興支援ボランティアに参加することができました。

今まで映像を通じて見た現地の状況が、そのまま自分の『目』に入り込んだ時に、まだまだ復興までにはほど遠いと感じ、そして、津波の恐ろしさを率直に感じたところです。

今回のボランティアを機に、現地の状況や声を沢山の人の人に伝えていくこと、一人の力は小さくとも、マンパワーに勝るものはないと改めて感じています。

今後も少しずつでも、復興を切に願い、関わっていききたいと思います。

[電力総連東京電力労組松本総支部・山本 佳靖]

南三陸町のボランティア活動で、瓦礫除去作業等に参加させて頂きました。

個人的には、昨年の5月に福島県のボランティアに参加し、被災地の状況を見てきましたが、今回震災から1年7ヶ月後の南三陸町の状況は、本当に復興が進んでいないのを実感させられました。

まだまだ自分の出来る事を見つけないが、南三陸町を忘れず、いつか復興後の町を見に来たいと思いました。

復興への足がかり

「電力総連東京電力労組松本総支部・増井 香織」

長野を深夜に出発して昼過ぎに到着した南三陸町。町の中心部は基礎しか残っていない土地が続いて、津波の悲惨さを語る防災庁舎の鉄骨だけ残った姿を初めてこの目で見たとき、生まれも育ちも長野の私では今まで理解できなかった津波の恐ろしさを実感した。

当日ボランティアセンターに出向くまで作業の内容が分からないということを事前に聞いて作業に入ったが、まだガレキの撤去作業に人手を割いていることとは思わなかった。

ガレキの撤去が終わっても多くの人の手を要する作業はまだある。継続的な支援をこれからも続けていきたい。

思いを実現、しかし・・・

「自治労長野県職員労組木曾支部・大熊 義夫」

震災発生以来、ずっと心に掛かっていた被災地でのボランティアを漸く実現することが出来て、自分の中でひと区切りがついた気がします。

行く前は1年半以上経っている今、本当にすることがあるんだろうかと思っていましたが、大変な思い違いで、復興が予想以上に進んでいないこと、現地では世の中の関心が薄れかけた今まさに人手を必要としていることを痛感しました。

ただ、この現状を知ってしまった今、今回限りのボランティアで終わりにすることは出来ないなど感じています。年齢的なものもあり、体力的にはきついです。また、機会があれば是非参加したいと思います。

「自治労長野県職員労組木曾支部・磯尾 典寿」

何か少しでも力になりたいと思っていたところ、ボランティア募集の回覧を見つけ「今しかない」と思い参加を申込みました。

南三陸町に着いた時「テレビで何度も見た場所だ」と気づくとともに、瓦礫が取除かれただけで、復旧が全然進んでいないことに愕然としました。

3日間と短い期間でしたので、とにかく全力で作業をしましたが、まだまだ人手が不足していることを痛感しました。

今後も機会があるごとに被災地の手助けを行ってまいりたいと思います。

「自治労朝日村職員労組・古畑 順子」

東日本大震災発生から1年7ヶ月目。私自身初めて被災地へ足を入れました。

「百聞は一見にしかず」その風景を見、空気に触れる事で皮膚で感じました。

南三陸町大雄寺周辺のガレキ片づけを行いました。お寺の山門に通じる石段の途中まで津波被害を受けています。でもその上は普段のまま変わらない時間が流れています。

被災して1年余り。少しは片づいたのか比べるものの無い中、地元社協の活動も頭の下がる想いです。

しかし、放射能汚染された福島では、手をつける事すらできない地域もあります。地震、津波も恐ろしい。でももっと恐ろしいのは目に見えない放射能だ、と思い知らされました。

でも民の生活は少しずつでもたくましい草の根のように、しっかり根を張り、いつかは昔のようなにぎやかさを取りもどすでしょう。

このような機会を与えてくださった連合、そして気持ち良く送り出してくれた職場に感謝申し上げます。

「全労金長野県労働金庫労組・魚住 友紀」

今回ボランティアツアーの参加は3回目でしたが、南三陸町でのボランティアは初めてでした。作業は、杉の木の運搬や、がれきの撤去作業を行いました。

震災後、あまり手がつけられていない所が多いため、前回のボランティア作業に比べて、力仕事が多く大変だと感じました。

しかし、ボランティアを必要としているところがまだまだ多いことを作業しながら感じましたので、また南三陸町でのボランティアに参加させて頂きたいと思います。

3日間ありがとうございました。

「UIゼンセン同盟片倉機器労組・秋山 直美」

今回2度目のボランティアに参加させていただき、ありがとうございました。

南三陸町での作業は、木材片付け・ガレキ撤去を行い、撤去された物は高く積みあげられ、多くの物を取除く事が出来たと思っていました。しかし、まわりを見渡せばほんの一部、元の状態に戻す為にはまだ道程は程遠く感じました。

出来る事は限られていますが、その中でも、一日でも早い復興の為に出来る限りの事を実行に移していきたいと思えます。

「電機連合長野日本電気労組・原 忠博」

連合ボランティアとしては2回目の参加をさせて頂きました。たまたま今年の3月に別のボランティアで伺った南三陸町に変更になったということで、どの程度復興が進んだのか非常に気になる中で現地に向かうこととなりました。

三陸道を降りて南三陸町に入ると見覚えのある風景が広がってきました・・変わっていない!と思ったのが正直な感想でした。大きな建物跡は無くなっていましたが、新しく出来たのかなと認識できたのは「きりこ」と呼ばれる白い看板のようなものだけでした。

(後から調べて分かったことですが、夏に行われた「福幸きりこ祭り」の際に作られたものだそうです。)



あの語り部の芳賀さんには、自分らでは想像をもできない状況を目の当たりにされ本当に辛かったであろう今までの、少しずつでしようが立ち直り伝えてくれたことに対して心から敬意を表しますし、

これからも多くの人に語り続けていって頂けたらと思いました。

実際に活動した大雄寺の参道は紫陽花でいっぱいになりたいとのことですし、住宅跡は今後測量を行うということでしたので、少しずつではあるかもしれませんが必ず良くなってもらうために、これからも息の長い支援活動を続けて行くことが必要なのだと改めて思うことができました。

[自治労安曇野市職員労組・大澤 淳]

少しでも応援できればと思い、初めてボランティアに参加させていただきました。

このような機会を設けていただいた連合長野さんと長電観光さんに感謝申し上げます。

2泊3日での参加では、移動時間に時間を要してまるまる1日作業する時間はありませんでしたが、1年を経過した今も被災地への支援がまだまだ必要であることを痛感しました。

ここでの体験、継続的に活動されている現地スタッフさんの思いを少しでも周りの人たちに伝えられたらと思います。

また機会がありましたら参加させていただき、今回知りあうことができました方たちとまたご一緒できたら嬉しく思います。

[自治労安曇野市職員労組・山田四七夫]

今回、連合長野主催の復興支援ボランティアに参加させていただきありがとうございました。限られた時間内での作業であったため、「地域に貢献できた」という印象はあまりありませんが、被災地の状況を見ることができ、またボランティアセンターの方々の話を伺うことで、私自身が「知る」ことができたことに感謝しています。

現地での話にもあつたとおり、被災地域の物産品を買うことで今後も支援を続けたいと思います。貴重な体験をさせていただきありがとうございました。

[自治労松本市職員労組・原 未来]

今回、東北復興ボランティアに参加させていただき、たった3日間の活動でしたが、被災地の現状を知り、多くのことを感じることができました。

まず、震災から1年半経った被災地は、場所によって復興の速度に差があり、まだまだたくさんの支援を必要としているということを知りました。今回ボランティアをさせていただいた南三陸町では、まさに、3月11日から時が止まっている状態で、これから復興していくところでした。がれき撤去の作業では、財布や靴下などが見つかり、この持ち主はいまどうしているのだろうなど、いろんなことを考えながら作業を行いました。また、語り部の方に震災当日のことを聞かせていただき、自分がこの立場に置かれたらどうしたんだろうとか、多くのことを考えさせられました。

初めて被災地を訪れ、ほんの少しですが、復興のためのお手伝いができ、またこれからどうやって被災地と向き合っていくか自分なりに考える機会となったこのボランティアに参加することができて本当によかったと思っています。復興には、これからどのくらいの年月がかかるか検討もつきませんが、今回私が知ったこと、感じたことを周りの方に伝え、少しでも被災地のために出来ることをしていこうと思います。

[自治労松本市職員労組・小澤 亜由美]

2011年3月11日、私は4年間過ごした東京で大学の卒業式を控えていました。

突然強い揺れが続き、今までの防災訓練で習ったことは何ひとつ出来ずにしゃがみこむことしかできずにいました。テレビでは津波の警報と高台への避難を繰り返し呼びかけ、パニック映画のような光景が画面に映し出されていました。

その後は携帯電話も使えず、電車も走らない、コンビニやスーパーからは水や食料品、生活用品が消え、計画停電の地域だった私の家のまわりは電気も信号も消え、ロウソクの明かりで夕飯を食べたこともありました。

毎日死者・行方不明者の数が増えていき、これが本当に起こっていることなのかもわかりませんでした。

それからはボランティアに行きたいと思いながら1年半が過ぎ、今回ボランティアに行かせていただくことができました。宮城県 南三陸町。被災当時テレビや新聞でよく目にしていた町。

震災から1年半が過ぎ、私の中で震災のことを思い出す機会が少なくなっていたということと、テレビなどでも復興が進んでいる様子が多く報道されていたので、正直それほどやることはないのではないかと感じていました。

しかし、私が目にした町はあの時から時間が止まったままのような姿でした。

私ができるお手伝いは一生懸命させていただきましたが、3日という短い時間では被災された方々の力になることはほとんどできませんでした。しかし、被災地の現状を見て、震災を語る被災者の方の話を聞いた者にしか伝えられないことがあると感じました。

被災された方が本当に必要としている支援は何か、私たちがすべきことは何かを考え、伝えていきたいと思います。

[自治労松本市職員労組・三村 竜一]

震災直後から被災地に訪れたいと思っていましたが、ようやく復興支援ボランティアに参加することが出来ました。

震災発生から1年半が過ぎ、復興も相当進んでいると思っていましたが、現地は復興どころか、復旧さえ出来ていない状況でした。

現地を訪れ、震災直後テレビやネットで観たあの映像と現地での光景が重なり、強烈な衝撃が走りました。

皆様、どんな形でも結構です。9. 11を忘れることなく、復興が遂げられる日まで、被災地を応援して下さい。

[自治労松本市職員労組・増澤 未咲]

今回初めてボランティア活動に参加させていただきました。

参加する前は、震災から1年半経った今、正直ボランティアとしてできる作業が残っているのだろうかと思っていましたが、実際に現地に入り、大量の瓦礫や手つかずの地がたくさん残っている光景を見て、まだまだ終わっていないのだなど、愕然としました。

瓦礫撤去の作業させていただいた畑でも、震災から1年半経った今尚、表面に携帯電話や衣類が残っており、復興までほど遠い現実を実感しました。

1日でも早く南三陸町の皆さんに震災前の暮らしが戻ることを祈って、これからも被災地で見たことを忘れず、できるだけ三陸産のものを購入するなど、少しでも南三陸町の方たちの役に立つようなことを心がけたいと思います。

[電機連合鈴木労組・関森 雄紀]

今回訪れた南三陸町の街並みには、大きな衝撃を受けました。復興には程遠く、まだまだ時間と人手が必要だという現実を、肌で感じさせられました。

復興支援に対して、どこか他人事のように考えていた私ですが、今回の貴重な経験で、今こそ日本の底力の見せどころではないかと強く感じています。

また機会があればぜひ参加したいですし、より多くの方に被災地に足を運んで頂き、復興の力となって頂ければ嬉しいです。がんばろう東北！

[連合佐久地協・佐藤 美佐]

震災直後からボランティアへの参加意欲はあったものの、体力面での不安や仕事を言い訳にして参加しないまま1年半が経過し、今回ようやく参加することが出来ました。

今回ボランティアを行った宮城県南三陸町は甚大な被害を受けた地域ですが、被災直後の地獄絵図のような凄惨な状態から比べるとガレキ撤去が進み「よくここまで片付いたものだ」と言うのが第一印象でした。

しかし、見渡す限り荒廃した地区一帯の中には、鉄骨だけが残った建造物、集積されたガレキの山、原形を留めていない自動車と漁船の山、塩害で立枯れている杉の木など、津波による深い爪痕が生々しく残されており、被害の大きさを見て取ることが出来ました。

一方で、私達が作業を行った田尻畑地区は雑草が生い茂り、一見すると「のどかな田舎の風景」にしか見えないほど、大きなガレキも被災した建造物も残されておらず、森閑とした様子が1年半という時間の経過を物語っているようでした。

しかし、作業を進め雑草の下から出てくる大量のガレキ・生活用品・文房具・おもちゃ・写真などを目の当たりにすると、確かに存在していた住宅地と人々の暮らしが偲ばれ、津波によって根こそぎ奪い取られた3.11の光景と共に、被害にあわれた方々の無念さが伝わり、胸が締め付けられる思いがしました。

南三陸町の復興は全然進んでいませんでした。復興どころか、ガレキも思い出の品も雑草に覆い隠され取り残されたままです。重機の入れない場所での作業、手作業でなければ出来ない事など、人海戦術で片付けなければならない事は山ほど残されており、その量は計り知れません。まだまだボランティアの力が必要です。

私を含め今回参加した多くの仲間が、ボランティアへの思いは抱いていたけれど実行に移せずにいたと話し、このツアーのお陰で1歩踏み出せたことに感謝をしています。私達が3日間で行った作業は、ほんの僅かな一助に過ぎません。現地に行かなくても支援は可能です。それでも現地に行って自分の目で確かめ、自分の手で作業をする事に大きな意味があるのだと実感しました。

連合長野に集う多くの仲間が被災地の復興と再生を願い、ボランティアへの意欲を持ち合わせていると思います。その気持ちを後押ししてあげるのが連合長野の役割であり、個人では踏み出せないけれど、仲間がいれば大きな一歩を踏み出せる、そんな労働運動の原点を形にしているのが復興支援ボランティアツアーだと思いました。大変素晴らしい取り組みだと思いますので、これから先も可能な限り継続していただき、息の長い支援活動となるよう願っています。

私自身も常に被災地に心を寄せながら、出来得る支援を続けていくことを誓い、最後に今ツアーで出会い共に作業をした皆さんと、長電観光さんに感謝の意を表して、ボランティア活動の感想とします。ありがとうございました。